

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



5

よろこびの知らせ
第5集

目 次

もしそうでなくても	1
ダニエル 3:13-18	
ネブカデネザルの告白	10
ダニエル 4:34-37	
ライオンの穴で	19
ダニエル 6:6-10	
天の雲に乗って	28
ダニエル 7:9-14	

ここに収められたのは、2019年12月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は “Gospel Project” に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

もしそうでなくても

ダニエル 3:13-18

3:13 そこでネブカデネザルは怒りたけり、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを連れて来いと命じた。それでこの人たちは王の前に連れて来られた。

3:14 ネブカデネザルは彼らに言った。「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ。あなたがたは私の神々に仕えず、また私が立てた金の像を拝みもしないというが、ほんとうか。

3:15 もしあなたがたが、角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くとときに、ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよし。しかし、もし拝まないなら、あなたがたはただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう。」

3:16 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。

3:17 もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。

3:18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

一、バビロン捕囚

先月までイスラエルとユダの滅亡までを学びました。いままでの舞台はパレスチナでしたが、今月から舞台がバビロンに移ります。バビロン帝国のネブカデネザル王はエルサレムを滅ぼし、主だった人々を自分の国に捕らえ移しましたが、これを「バビロン捕囚」と言います。

大勢のユダヤの人々がバビロンや、その後バビロンにとってかわったペルシャの地で生活し、そこにダニエルやエゼキエルといった預言者、ゼルバベルやネヘミヤといった政治家、エズラなどの律法の学者が起こされました。聖書はパレスチナだけでなく、バビロンやペルシャの地でも書かれました。また、旧約聖書の大部分が今日のような形にまとめられるようになったのも、おそらくバビロンの地であったと思われます。

バビロン捕囚から逃れた人々もいて、その一部はエジプトに行き、そこにもユダヤ人のコミュニティを作りました。そのエジプトで、エジプト王の命令により、聖書がヘブライ語やアラム語からギリシャ語に翻訳されました。このギリシャ語訳聖書は初代のクリスチャンによって使われたもので、ヘブライ語の原典を補うものとして、今日も使われています。

ユダヤの人々には、神の言葉をまわりの国々に伝える使命が与えられていました。ところが、彼らはその使命を果たさなかつたどころか、自分たちに与えられた神の言葉をないがしろにしたのです。そのため、外国に散らされるという刑罰を受けたのですが、神は、その刑罰の中にもあわれみを施し、神の言葉、聖書が保存され、翻訳され、世界の人々に読まれるために、ユダヤの人々を外国の地で用いてくださったのです。ユダヤの人々は、神の言葉を世界に広め、人々に救い主の到来を待ち望ませるといふ、神の民としての使命を果たすようになったのです。

主は、ユダヤの人々が自分たちの土地を追われ、バビロンに捕らわれ、エジプトに寄留しなければならなくなるという不幸をさえ、世界の救いのために用いてくださいました。歴史を詳しく学ぶと、神のご計画の不思議さに驚きます。そこに表された神の恵みに感謝せずにはおれなくなります。たとえ罪を犯した神の民であっても、主は、その回復を願い、捕囚の地バビロンにまでも共に行ってくださいましたのです。この主が、今も、私たちがどこにいても、共にいてくださると約束してくださっています。そのことを信じ、このお方を仰ぎ見ることができる幸いを深く感謝したいと思います。

二、ダニエルと三人の若者

さて、バビロンに連れ行かれた人々の中に、特別に優れた若者たちがいました。ダニエルと、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤの四人です。彼らは、やがてバビロン政府の官吏となるように、特別な教育を受けることになりましたが、その前に、ダニエルと三人の若者に新しい名が与えられました。「ダニエルにはベルテシャツアル、ハナヌヤにはシャデラク、ミシャエルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴ」（ダニエル 1:7）です。

「ダニエル」という名は「神は審判者」という意味ですが、「ベルテシャツアル」（命を守りたまえ）は神々への祈りの言葉の一部分だとされています。「ハナヌヤ」は「主はあわれみ深い」、「ミシャエル」は「誰が神のようであるか」という意味ですが、「シャデラク」や「メシャク」はバビロンの月の神アクの名前がおりこま

れた名前です。「アザルヤ」は「主は助けたもう」という意味ですが、バビロンの神ネボのしもべという意味の「アベデ・ネゴ」と名付けられました。このような名は、四人の若者たちに、自分たちの神を忘れ、バビロンの神々を拜むようにという圧力でしたが、彼らは、そのような名で呼ばれても、主の民であることを強く意識し、偶像の神々に膝をかがめることをしませんでした。

ダニエルと三人の若者たちにはネブカデネザル王の食卓からの食べ物があてがわれました。王が食べるものですから、それはとびきりのご馳走であつたに違いありません。それは、他の人には特権だったのでしょうが、ダニエルと三人の若者たちには迷惑なものでした。ユダヤの人々は、神の民としてのアイデンティティを守るため、食べ物に関する規定を守っていたからです。それでダニエルは、自分たちの世話役に王の食卓から来る肉やぶどう酒を避け、野菜と水だけにしてほしいと願い出しました。しかし、世話役には心配がありました。このユダヤの若者たちが、肉を食べている他の若者たちよりも顔の色艶が悪くなったら、世話役である自分が責められるからです。それで十日の間試しましたが、ダニエルたちの顔色は「王の食べるごちそうを食べているどの若者よりも良く、からだも肥えて」いたので、「彼らの食べるはずだつたごちそうと、飲むはずだつたぶどう酒とを取りやめて、彼らに野菜を与えることに」（同 1:15-16）なり、ダニエルの願いは聞かれたのです。

教育の期間が終わって、ダニエルと三人の若者が王の

前に出たとき、その知恵と知識は他の誰にも勝っていて、王の質問に答えることができなかつたものは何ひとつありませんでした。それで彼らにはそれぞれに地位と役職が与えられ、王に仕えることになりました（同 1:18-19）。

私たちが母国に帰ると、とくに日本では、仏教や神道の宗教儀式にかならずとって良いほど、関わりを持たされます。一般企業ばかりでなく、お役所にも神棚が祀られていますし、「リニア中央新幹線」などの最先端の技術を用いたものの起工式にも神官が来て、お祓いをするのです。それぞれの家庭には仏壇があり、仏教は祖先崇拝と強く結びついています。まことの神への信仰を持つ者にとっては、そうした中で信仰を守り、それを証しするのは大きなチャレンジです。家族や親族への愛の配慮を怠ってはいけませんが、主への信仰を貫き通す勇氣も求められます。私たちが、ダニエルと三人の若者にならって、主に従う道を探り求め、そこで主を証ししたいと思います。主は、主への信仰を守り通す者を、まことの神を知らない人々の地であったとしても、その場所で守り、導き、祝福してくださるからです。

三、燃える炉からの救い

やがてダニエルは王宮の学者たちの長官となり、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの三人はバビロン州の事務官となりました（ダニエル 2:48-49）。彼らはユダヤ人ではありましたが、王に認められ、その将来を約束されていました。しかし、すべてが順調ではありませんでした。

した。試練の時が来たのです。ネブカデネザル王はドラの平野に黄金の像を造り、その奉献式にバビロンの高官たちを集め、それを拝ませました。ダニエルは王宮にいたためそれに加わりませんでした。シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの三人はその奉献式に出なければなりません。三人は奉献式に出ましたが、その像を礼拝しませんでした。それで、この三人をこころよく思っていない人物が、三人を王に訴えて、こう言いました。「王よ。この者たちはあなたを無視して、あなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝みもいたしません。」（同 3:12）

これを聞いた三人を連れて来させ、こう言いました。「もしあなたがたが…ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよし。しかし、もし拝まないなら、あなたがたはただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう。」

（同 3:15）三人は、王にこう答えました。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。もし、そうならば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」（同 3:16-17）ネブカデネザルは古代の王の中で最も権力のある王で、誰も彼に逆らうことができなかつたと言われています。そのネブカデネザルに

「ノー」を言ったのは、歴史の中でこの三人だけだったかもしれません。王の命令に逆らうことは死を意味しましたが、三人は、「もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません」と言い切ったのです。

この三人には捕虜として外国から連れてこられた者には十分すぎるほどの恩典が与えられていました。彼らは一生を安楽に暮らすことができたのです。しかし、彼らは、自分たちの人生がそれだけのものではないことを知っていました。自分たちの人生は神に従うためにあり、自分たちには偶像に満ちた地でまことの神を証しするという使命があることを忘れてはいませんでした。

「使命」は漢字で「命を使う」と書きます。三人は、神のために命を使う時は今だと悟ったのです。

ネブカデネザルは怒りに燃え、三人を縄で縛らせ、炉の火を七倍熱くさせたうえで、炉の中に投げ込ませました。普通なら、この三人はたちまち燃え尽きてしまうはずなのに、三人は縄を解かれて炉の中を歩いていたのです。しかも、もうひとりの人がいっしょにいて三人を火から守っていたのです。それを見たネブカデネザルは驚いて、「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ。いと高き神のしもべたち。すぐ出て来なさい」と言いました。炉から出てきた三人は「その頭の毛も焦げず、上着も以前と変わらず、火のにおいもしなかった」（同 3:26）と聖書は言っています。彼らを縛っていた縄だけが燃え、

彼らは無傷でした。ネブカデネザルは非常に激しやすい人でしたが、そういう人であるだけに、この奇蹟を見て感動し、こう言いました。「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。」（同 3:28）そして「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神を侮る者はだれでも、その手足は切り離され、その家をごみの山とさせる」（同 3:29）と言って、ユダヤの人々の信仰を保護したのです。

聖書は、「バビロン捕囚」はユダヤの人々にとっては「悩みの炉」（イザヤ 48:10）であったと言っていますが、ダニエル3章の出来事は、まさに主が人々を「悩みの炉」から救い出してくださるお方であることを物語っています。私たちがまた、人生の中でさまざまな試練や苦しみという「悩みの炉」に投げ込まれることが、何度かあるでしょう。生きるということは簡単なことではありません。私たちの人生には予期しなかったような出来事が突然起こるものです。前にも進めず、後ろにも退くこともできない。右を見ても左を見ても良い結果など見えないときもあるのです。そのような時、主が捕囚にあったユダヤの人々にしてくださったこと、ダニエルと三人の若者が堅く信仰に立ったこと、そして、主が三人をその信仰に答えて救い出してくださったことを思い起こしたいと思います。

この三人の若者の身に起こったような奇蹟がいつでも起こるとは限りません。けれども、神の答えが私たちの期待するものと同じでなかったとしても、私たちは神を信じ、神に従い通したいと思います。神は善であり、善を行ってくださいます。最悪だと思えるような時でも、そこから善きものを生み出してくださいます。信仰の決断が悪い結果をもたらすように見えても、「たとえそうでなくても」と、神を信じ、従うところに信仰の勝利があります。私は多くの信仰者がこう言うのを聞いてきました。「あの時は辛かったけれど、大変だったけれど、神を信じることができて良かった。キリストに従うことができたからこそ、今の恵み、幸いがあるのだと思います。」私たちもそのようにして、神の恵みを証ししたいと思います。

(祈り)

全世界を治めておられる主なる神さま。あなたは、あなたへの信仰を貫いた者たちを燃える火の炉から救ってくださいました。私たちも、「悩みの炉」に投げ込まれることがあります。そこにも主は共にいてくださることを信じて、ひたすらにあなたに頼ることができるようにしてください。試練の火が、きよめの炎となって、信じる者をきよめ、あなたにある信仰の幸いをもたらしますように。主イエスのお名前です。

ネブカデネザルの告白

ダニエル 4:34-37

4:34 その期間が終わったとき、私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。すると私に理性が戻って来た。それで、私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。

4:35 地に住むものはみな、無きものとみなされる。彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押えて、「あなたは何をされるのか。」と言う者もない。

4:36 私が理性を取り戻したとき、私の王国の光栄のために、私の威光も輝きも私に戻って来た。私の顧問も貴人たちも私を迎えたので、私は王位を確立し、以前にもまして大いなる者となった。

4:37 今、私、ネブカデネザルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。また、高ぶって歩む者をへりくだった者とされる。

一、ネブカデネザルが見た夢

バビロンの王ネブカデネザルは、ある時夢を見ました。それは、私たちがふだん見る夢とは違って、人の心にくつきりと残るもので、それは神からネブカデネザルへの語りかけでした。神の言葉が幻の形で彼に示されたのです。その幻とはこうです。

広い土地の中央に一本の天にまで届くような巨大な木がありました。それは地の果てのどこからでも見る事ができるほどでした。葉は美しく、実も豊かで、その実は、その木の下に集まる獣や枝に宿る鳥を養っていました。ところが、天から地を見張る者のひとりが降りてきて、こう言いました。「その木を切り倒し、枝を切り払

え。その葉を振り落とし、実を投げ散らせ。獣をその下から、鳥をその枝から追い払え。ただし、その根株を地に残し、これに鉄と青銅の鎖をかけて、野の若草の中に置き、天の露にぬれさせて、地の草を獣と分け合うようにせよ。その心を、人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時をその上に過ごさせよ。」（ダニエル 4:10-16）

この夢はネブカデネザル王を悩ませました。彼は王宮の知者にその解き明かしを命じましたが、誰も解き明かすことができず、ネブカデネザルはますます不安になりました。

そこに、ダニエルがやってきました。ネブカデネザルはダニエルを待ち構えていたかのようにして、こう言いました。「私の国の知者たちはだれも、その解き明かしを私に知らせることができない。しかし、あなたにはできる。あなたには、聖なる神の霊があるからだ。」（ダニエル 4:18）ネブカデネザルは先に、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴが燃える炉の中から救い出された時、まことの神を「いと高き神」と呼びましたが、ここでは「聖なる神」と呼んでいます。ネブカデネザルは、自分が見た幻がバビロンの神々からのものではなく、「いと高く」「聖なる」神からのものであると感じていましたので、その神の霊の宿るダニエルに解き明かしを求めたのです。

ユダヤの若者が王の夢を解き明かすという出来事はずっと以前にもありました。それは創世記 39-41 章に書か

れています。ヤコブの十一人目の子ヨセフは、他の兄弟たちに妬まれ、エジプトに奴隷として売られました。エジプトの王、ファラオの役人に買われましたが、その能力を発揮して、役人の家の管理を任せられるまでになりました。ところが、その妻の誘惑を断ったため無実のまま牢獄に入れられました。しかし、看守の信頼を得て、囚人であるのに、看守に代わって牢獄の一切をとりしきるようになりました。ヨセフは、その牢獄でファラオの側近の夢を解き明かしてやり、彼が赦されてもとの仕事に戻ったら、ファラオにとりなしてほしいと頼んだのですが、頼まれたその人は、ヨセフのことをすっかり忘れてしまいました。

しかし、ファラオが不思議な夢を見て、それを解き明かす者を求めたとき、その人はヨセフのことを思い出し、ヨセフはファラオの前に呼び出され、ファラオの夢を解きました。ファラオはヨセフに「神の霊が宿っている」ことを認め、王に次ぐ位を彼に与えました。この後、大きな飢饉が襲ったのですが、エジプトはヨセフの手腕によって飢饉から救われ、ヨセフは父親ヤコブと兄弟たちを救う者になったのです。

ヨセフは奴隷に売られ、ダニエルは捕虜となり、それぞれ外国に移されました。しかし、彼らが遭ったそのような苦しみには目的がありました。彼らは外国の地で、普通の人なら近づくことができない王の前に出て、まことの神を証しするという特別な使命を与えられていたのです。そして、ヨセフもダニエルも、神に従うことに

よって、その使命を果たし、王からも信頼を得ました。

私たちも、自分で選んでであれ、配偶者や親に連れられてであれ、生まれた国からアメリカに来て、仕事をし、生活をしています。考えてみれば不思議なことで、そこには神のご計画があり、神は私たちに何か特別な使命を与えておられるように思います。ヨセフやダニエルがしたことは特別なことで、誰もができません。けれども、イエス・キリストを信じる者にはヨセフやダニエルと同じように、神の霊、聖霊が宿っています。そして聖霊は、私たちに神を証しし、神が私たちにお与えになった使命を果たすことができる力を与えてくださっています。私たちも、神がひとりひとりにお与えくださった持ち場で、その使命に生きる幸いを体験したいと思います。

二、ダニエルの解き明かし

さて、ダニエルの夢の解き明かしを見ましょう。それは20-27節に書かれています。

夢に現れた大木は、ネブカデネザル王のことです。その大きさや高さは、ネブカデネザル王の権力の大きさを表します。木の下に獣が住み、枝に鳥が宿っているのは、王のもとで多くの国民が平和と繁栄を楽しんでいることを表します。ダニエルは「王さま、その木はあなたです。あなたは大きくなって強くなり、あなたの偉大さは増し加わって天に達し、あなたの主権は地の果てにまで及んでいます」（22節）と言いました。

夢の後半は、その木が切り倒され、その根株が捨て置

かれ、野ざらしになるというものでした。ダニエルはそれを解き明かして、ネブカデネザルの身に特別なことが起こり、野の獣とともに住み、牛のように草を食べ、天の露にぬれるようになると言いました。しかし、根株が残っていることは回復があることを意味します。七つの時が過ぎた後、ネブカデネザルは再びもとに戻るのです。彼の身にこのようなことが起こるのは、ネブカデネザルが「いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなう者にお与えになることを知る」ようになるためでした（25節）。当時、並ぶところのない権力を持っていたネブカデネザルに、神は、世界の本来の支配者は「いと高き神」であることを教え、彼と、その後の地上の王たちに、神の前にへりくだって正義を行うよう教えるためでした。ですから王の夢を解き明かした後でダニエルは、「それゆえ、王さま、私の勧告を快く受け入れて、正しい行ないによってあなたの罪を除き、貧しい者をあわれんであなたの咎を除いてください。そうすれば、あなたの繁栄は長く続くでしょう」と勧めています。

ネブカデネザルは、気性の激しい残酷な王として知られていましたが、ダニエルのこの勧告を受け入れ、その態度を改めました。ネブカデネザルが夢を見てから何ヶ月も過ぎましたが、王の身には何も起こりませんでした。ところがちょうど一年が経った時のことです。王はバビロンの宮殿の屋上を歩いていました。そこは王が王妃のために作った「バビロンの空中庭園」がありまし

た。それは高い建物の上にあっただので、遠くから見るとまるで空中に浮いているように見えたのです。バビロンの空中庭園は世界七不思議の一つで、高い建物の屋上まで水を運ぶため、棕櫚の木が使われ、その上に土がかぶせられ、そこに植えられた植物は棕櫚の木の隙間に根をおろし、水を吸収したそうです。彼が作ったバビロンの都はユーフラテス川をまたぐように作られ、何マイル以上もの城壁に囲まれ、その中には今までなかったような建物がいくつも建てられていました。ネブカデネザルは、空中庭園からバビロンの町を眺めてこう言いました。「この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」（30節）彼の心に以前の高ぶりが戻ってきたのです。

すると、彼がそう言い終わらないうちに、天からの声がありました。「ネブカデネザル王。あなたに告げる。国はあなたから取り去られた。あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べ、こうして七つの時があなたの上を過ぎ、ついに、あなたは、いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなう者にお与えになることを知るようになる。」

（31-32節）この言葉は、ただちにネブカデネザルの上に成就しました。

聖書はネブカデネザルの身に起こったことを次のように言っています。「彼は人間の中から追い出され、牛のように草を食べ、そのからだは天の露にぬれて、つい

に、彼の髪の毛は鷲の羽のようになり、爪は鳥の爪のようになった。」（33節）ネブカデネザルが精神的な障害をきたし、自分を獣の仲間だと思い込み、宮廷の中にある獣を飼っている庭、動物園のようなところで、髪も爪も伸び放題になって過ごしたのです。その状態は「七つの時」の間続きました。バビロンでは「七つの時」というのは三年半のことです。ネブカデネザルの碑文の中に、彼が四年の間憂鬱な時を過ごしたという記録があるので、それが、この時のことをさしているのかもしれませんが。これは何かの物語のように聞こえますが、彼の身に実際に起こったことで、神がネブカデネザル王を懲らしめるためにされたことでした。

三、ネブカデネザルの告白

神の懲らしめの期間が過ぎ、ネブカデネザルの理性も、健康も、王の位も、元に戻りました。彼は、自分の身に起こったことが、いと高き神のなさったことであることを、ダニエルの言葉を通して知っていましたので、回復したとき国中にお布れを出しました。それがそのままダニエル4章になったのです。そこに「ネブカデネザル王が、全土に住むすべての諸民、諸国、諸国語の者たちに書き送る。あなたがたに平安が豊かにあるように」（1-2節）とありますが、これは、王がお布れを出す時の体裁にそっています。そして、そこに、ネブカデネザルは、神への賛美の言葉をそこに書いています。「いと高き神が私に行なわれたしるしと奇蹟とを知らせることは、私の喜びとするところである。そのしるしのなんと偉大な

ことよ。その奇蹟のなんと力強いことよ。その国は永遠にわたる国、その主権は代々限りなく続く。」（3節）あのエルサレムを滅ぼした残虐な王が、今、神の前に謙虚になって、自分が滅ぼした人々が信じる神をほめたたえているのです。

預言者ハバククは、ネブカデネザルの悪をなぜ神は許しておられるのか、なぜ彼を裁かないのかと神に訴えましたが（ハバクク 1:13-17）、この箇所には神の答がありません。神がネブカデネザルを滅ぼさなかったのは、歴史の中で後にも先にもないような大きな権力を持つ王に、ご自分の力を知らせ、彼の口で神を賛美させるためだったのです。彼の口を通して「いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てること」（ダニエル 4:17）を世界に知らせるためでした。

ダニエル 4 章は、神が全世界の主であることを教えています。イスラエルばかりでなく、世界のすべてを治めておられるのです。そして、新約時代の私たちは、この高き神の御子がイエス・キリストであり、イエス・キリストが聖なる神の聖なる御子としてお生まれになったことを知っています。そして神は御子にすべての権威、権能を与え、あらゆるものの上に高く上げられました。ピリピ 2:9-11 にこうあります。「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをか

がめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」これは、イエス・キリストが再臨し、世界を治めるときに完全な形で実現しますが、「イエス・キリストは、私の人生の主です」と告白して、信仰が証しされるところではどこでも、人々がイエス・キリストをあがめるようになることによって、今も成就しているのです。ダニエルが神が主権者であることを証ししたように、私たちもイエス・キリストが主であることをさらに証ししていきたいと思います。

(祈り)

すべてを治めておられる主なる神さま。あなたはバビロンの王をさえもへりくだらせ、あなたの主権を認め、あなたを賛美する者とされました。私たちにも、へりくだってあなたの前に歩むことを教えてください。また、ダニエルがバビロンの王のために用いられたように、時代が違い、立場は違っても、私たちを、あなたの使者として用いてください。主イエス・キリストのお名前です。祈ります。

ライオンの穴で ダニエル 6:6-10

6:6 それで、この大臣と太守たちは申し合わせて王のもとに来てこう言った。「ダリヨス王。永遠に生きられますように。

6:7 国中の大臣、長官、太守、顧問、総督はみな、王が一つの法令を制定し、禁令として実施してくださることに同意しました。すなわち今から三十日間、王よ、あなた以外に、いかなる神にも人にも、祈願をする者はだれでも、獅子の穴に投げ込まれると。

6:8 王よ。今、その禁令を制定し、変更されることのないようにその文書に署名し、取り消しのできないメディアとペルシヤの法律のようになしてください。」

6:9 そこで、ダリヨス王はその禁令の文書に署名した。

6:10 ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

一、バビロンの終焉

ダニエル 6 章を学ぶ前に、5 章にあるバビロンの滅亡のことを学んでおきましょう。この時代になると、歴史の資料が豊富にあって、歴史学者たちが様々な研究を進めていけばいくほど、聖書に書かれていることが正確であることが分かるようになりました。歴史家たちが再現したバビロンの歴史から少しだけお話をします。

ネブガデネザルの死後（562 BC）、息子アメル・マルドゥクが王位を継ぎました。彼は、聖書では「エビル・メロダク」という名になっています。彼は、若くしてバビロンに連れて来られたユダの王エホヤキンを牢獄から

解放し、優遇した人として描かれています（列王記 25:27-30）。アメル・マルドゥクは、在位わずか二年で、義理の兄弟に殺されてしまいました。

アメル・マルドゥクを殺してバビロン王となったのはネリグリサルでした。彼はネブカデネザルの娘と結婚し、ネブカデネザルの時代から活躍し、高い地位を与えられていたようです。ネリグリサルは聖書では「ネルガル・サル・エツツエル」と呼ばれ、ネブカデネザルが預言者エレミヤをエルサレムの「監視の庭」から救い出すために遣わした使者のひとりとして描かれています（エレミヤ 39:11-14）。彼は王になって四年で亡くなり、彼の息子が王位を継ぎましたが、九ヶ月で殺され、ナボニドスが王となりました。

ナボニドスはバビロンの祭司たちによって担ぎ出された王で、彼自身は政治に興味がなく、実際のことは息子ベルシャツアルにまかせていました。ナボニドスは、バビロンを出て、別の町で暮らしており、バビロンの王宮にいたのはベルシャツアルでした。それで、聖書はベルシャツアルをバビロンの王と呼んでいます。

ナボニドスは、ペルシャのクロス王がまわりの国々を滅ぼし、バビロンを攻めようとしていた時、諸国の神々の偶像をバビロンに集めました。数多くの神々を祀れば、それだけバビロンは安全になると考えたのです。しかし、これは、他の国々にしてみれば、自分たちの神をバビロンに奪われたということになり、バビロンに対する反感を高めるだけでしかありませんでした。また、バビロンの祭司たちからは、自分たちの神々をおろそかに

したという非難も受けました。

バビロンが滅びようとしているまさにその日、王宮では宴会が開かれていました。ベルシャツアルはエルサレムの主の宮から持ってきた器具を持ってこさせ、それで酒を飲みながら、偶像を拝んだのです。ダニエル 5:4に「彼らはぶどう酒を飲み、金、銀、青銅、鉄、木、石の神々を賛美した」とある通りです。これほどの冒瀆はありません。すると突然、人間の手の指が現われ、王の宮殿の壁に文字を書きました。しかし、誰もそれを読み、解き明かすことができませんでした。それでダニエルが呼ばれました。

壁に書かれた文字は「メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン」、その意味は「数えられよ。数えられよ。重さを量られ、分けられよ」で、バビロンの日数は数えられ、それが尽きたこと、ベルシャツアルは秤にかけて量られ、重さが足りないことが分かり、彼の王国は分割されてメディア人とペルシャ人に与えられるという、神の審きの宣言でした。ダニエルがその文字を解き明かしたその夜、メディアとペルシャの連合軍がバビロンに入り、ベルシャツアルは殺され、バビロンはネブカデネザルの死後 25 年をしないで滅びました。ペルシャのクロス王は、ナボニドスとベルシャツアルの悪政からの解放者として歓迎され、戦わずして、バビロンを手に入れたのです。クロス王は、ナボニドスが集めた神々をそれぞれの国に返してやり、バビロンの高官たちをそのまま用い、グティウムの総督ゴフリユアスをバビロンの王としました。聖書は「メディア人ダリヨスが、およそ六十二歳で

その国を受け継いだ」と言っていますが、この「ダリヨス」とは、ゴフリユアスのことです。

二、不敬虔な者の滅び

バビロン終焉の歴史は「いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てる」（ダニエル 4:17）という言葉の思い起こさせます。ネブカデネザルは高慢で残酷な王でしたが、三年半にわたる懲らしめの時を経てまことの神の前にへりくだりました。それでネブカデネザルはバビロンの王であり続けることができたのです。ところが、その後継者たちは、ネブカデネザルのことから何も学びませんでした。ベルシャツアルはその教訓を良く知っていながら、驕り高ぶり、まことの神の宮の聖なる器を、この世の宴会のために使ったのです。そもそも、ベルシャツアルがそこまで迫っているのに、宴会騒ぎをしていたこと自体が、バビロンを治める者として失格であることを示しています。それで神は高慢で不敬虔なベルシャツアルから国を取り上げ、謙虚で穏健なダリヨスにバビロンを渡されたのです。「人の心の高慢は破滅に先立ち、謙遜は榮譽に先立つ」（箴言 18:12）とは、全くその通りです。

自らの力に頼り、神をあなどった国が栄えたためしはありません。ベルシャツアルはバビロンが難攻不落の要塞であることに頼っていました。バビロンの都は正方形で、その一辺が十数マイルにも及びました。その城壁は高さが三百フィート以上、幅が八十フィート以上もあり

ました。フットボールのフィールドが長さ 360 フィート、幅 160 フィートですから、その城壁がどんなに巨大なものであったかが分かります。城壁の上を 2 台の馬車が並んで走ることができたほどです。城壁の外側には水の流れる大きな堀があり、内側には、もう一つの城壁がありました。外壁が破られても、内側の城壁で敵を防ぐことができ、しかも、外壁と内壁の間に水を流し込むこともできました。バビロンの城壁はどんな外敵にも耐えられるもので、ペルシャの軍隊もそれを突き崩すことはできませんでした。しかし、バビロンは内側の腐敗によって自滅しました。無能な王たちによる混乱に嫌気をさしていた人たちが城門を開き、ペルシャ軍を迎え入れたのです。

内部から腐って駄目になるというのは、いろんところで見ることができます。企業でも同じようなことがあります。取締役が親族ばかりで、放漫な経営をしたり、不正を見てみぬふりをしたり、親族同士で争ったりしているようなところは、長くは続きません。また、それは、私たちの人生でも同じです。どんなに能力があり、機会に恵まれた人であっても、人格に問題があって、人々の信頼を失うようなことがあったら、その人は、能力や機会を生かすことができないままで終わるでしょう。また、仕事の面で成功しても、結婚や家庭生活に問題があれば、それは幸いな人生とは言えないでしょう。解決されていない内面の問題があって、そこからドラッグに手を出し、今までの経歴を棒に振り、約束された将来を失ってしまうということも、よくあることです。たとえ、能力、地位、財産などが、バビロンの城壁のよう

に私たちを守っていたとしても、私たちの内面に問題があれば、それらは役に立たないのです。聖書は「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく」（箴言 4:23）と教えています。

しかし、どうしたら自分の心を守ることができるのでしょうか。小さなことでクヨクヨしたり、イライラしたり、まわりの意見に流されてしまう私たちが、いつも正しい方向に心に向けていられるのでしょうか。自分の力でできる人は誰もいません。イエス・キリストによって心の奥深くにある罪を赦していただき、きよめていただき、聖霊によって強め、支えていただかなければならないのです。イエス・キリストを心に迎え入れましょう。ひとつひとつの事柄を祈りによって主に委ねましょう。聖書は教えています。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。」（ピリピ 4:6-7）

三、敬虔な者の救い

ダニエル 5 章は不敬虔な者の滅びを告げていましたが、ダニエル 6 章は敬虔な者は救われると教えています。ダニエルは、ネブカデネザルの死後、政治から遠ざかっていました。その後の王たちは彼のことを忘れていました。けれどもダリヨスはダニエルを重く用い、高い地位に就けました。すると、「ユダからの捕虜のひとり」（ダニ

エル 6:13) にすぎないダニエルが王の信任を篤く受けているのを快く思わない人々が、ダニエルを失脚させようとなりました。ダニエルには何の落ち度もなかったのに、彼らは一計を案じ、「今から三十日間、ダリヨス王以外に、どんな神にも人にも、祈願をする者はだれでも、ライオンの穴に投げ込まれる」という法律を王の名によって作りました。それは、彼らがダニエルが日に三度、彼の家の屋上にある部屋からエルサレムのほうを向いて祈るのを知っていたからです。

ダニエルは彼らの悪巧みを知り、王がその法律に署名したことを知っていましたが、いつものように祈りました。ダニエルにとって日々の祈りは、どんなことよりも大切なことだったからです。悪巧みを図った人々はダニエルが祈る姿を見届け、ダニエルを王に訴え、ダニエルはライオンの穴に投げ込まれました。

王は、ダニエルの失脚を狙っていた人々の言葉に乗せられてダニエルに不利になる法律に署名したことを悔い、ダニエルを案じて、食事も摂らず、一睡もしませんでした。夜が明けるとすぐ王はライオンの穴に行って、こう言いました。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」すると、穴の中からダニエルの返事が返ってきました。「私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。」(ダニエル 6:20-22) 神はダニエルを飢えたライオンから救ってくださったのです。ダニエル 6:23 はこう言っています。「ダニエルは穴から出されたが、彼に何

の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。」聖書は教えています。「人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。」（箴言 29:25）ですから、苦しみに遭うときは、こう祈りましょう。「私のたましいを守ってください。私は神を恐れる者です。わが神よ。どうかあなたに信頼するあなたのしもべを救ってください。」（詩篇 86:2）

ダニエルの信仰は、ペルシャの人々にとって大きな証しとなりました。ダリヨスは次のような勅令を出しました。「あなたがたに平安が豊かにあるように。私は命令する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震え、おののけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」（ダニエル 6:25-27）28 節には「このダニエルは、ダリヨスの治世とペルシャ人クロスの治世に栄えた」とあり、クロス王の名前が出てきますが、このクロス王が、ユダヤの人々を故郷の地に返し、神殿を再建することを許し、また、援助した王です。ダニエルの信仰の証しは、ダニエルひとりを守り、栄えさせただけではなく、神の民全体に大きな祝福となりました。そのことによって救い主イエス・キリストは、ダビデの子孫の中から、ベツレヘムで生まれることになったのです。クロス王が、ユダヤの人々の帰還を許さなかったら、ダビデの子孫はペルシャに留まったままで、預言は成就しなかったのです。神は、敬虔な者を救

天の雲に乗って

ダニエル 7:9-14

7:9 私が見ていると、幾つかの御座が備えられ、年を経た方が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりけのない羊の毛のようであった。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、

7:10 火の流れがこの方の前から流れ出ていた。幾千のものがこの方に仕え、幾万のものがその前に立っていた。さばく方が座に着き、幾つかの文書が開かれた。

7:11 私は、あの角が語る大きなことばの音がするので、見ていると、そのとき、その獣は殺され、からだはそこなわれて、燃える火に投げ込まれるのを見た。

7:12 残りの獣は、主権を奪われたが、いのちはその時と季節まで延ばされた。

7:13 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。

7:14 この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。

一、キリストの再臨

旧約聖書は、「救い主が来られる」という約束の書物で、新約聖書は、「救い主が来られた」という成就の書物です。「久しく待ちにし、主よ、とく来たりて」という賛美のように、旧約時代の人々は救い主の到来を待ち望みました。新約時代の私たちは「主は来ませり」と歌って、イエス・キリストが来てくださったことを喜びます。イエス・キリストは救いのみわざを成し遂げたあと、天にお帰りになりましたが、もういちど世に来てく

ださると、約束されました。それを「再臨」（“Second Coming”）と言います。

イエスが雲に包まれ昇天された時、天使が現われて弟子たちにこう告げました。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」（使徒 1:11）「天に上って行かれるのと同じ有様で」というわけですから、再臨の時も、昇天の時と同じように雲に乗って来られるのです。「雲」は神の栄光を表します。エジプトから救い出されたイスラエルが荒野を旅した時、雲の柱が立って、その行く先を導きました。また、モーセの時代に神の幕屋が完成した時も、ソロモンが神殿を建てた時も、栄光の雲がそこを満たしました。そして、イエスが変貌の山に登られた時、イエスが栄光の姿に変わり、モーセとエリヤが現われ、雲が沸き起こって、三人を包みました。イエスが「雲に乗って来られる」というのは、再臨の時、イエスはその栄光を何一つ制限することなく、この世に来られることを言っているのです。

イエスがもう一度世に来られるのは、神の国の完成のためです。「神の国」、それは「天の国」とも呼ばれます。おとぎ話の「天国」は大空のかなたにあつて、そこに神がおられ、天使たちが住み、死んだ人がそこに行く場所として描かれています。けれども、大空のどこにもそういう場所はありません。最初の有人宇宙飛行士と

なったソヴィエトのガガーリンは「地球は青かった」と言いましたが、ガガーリンの次に宇宙に行ったチトフは「天に神はいなかった」と言ったそうです。大空の向こうは宇宙空間で、そこに「天の国」があるわけではありません。そのようなことは古代の人々もよく知っていました。「天」は、私たちの住む世界と同じ次元のものではなく、霊の次元に属するものです。しかし、天の世界と私たちの世界とは分離したものではなく、つながっています。主の祈りに「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」（マタイ 6:10）とあるように、私たちの世界には、天の父の愛の支配が必要なのです。人が神の支配を拒み、その愛から離れてしまっているところに今日の世界の混乱があり、私たちの不幸の原因があります。

イエスは「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）と言って宣教を始めました。イエスが伝えた神の国は地上のどこかの国のことではありません。「国」という言葉は、「支配」とも訳すことができます。イエスは神の国とは、罪の赦しに基づいた、神の愛と正義と平和の支配のことであると教えられました。それはまず人の心の中にもたらされ、それが個人を変え、家庭や職場、地域を変え、社会を変え、国家を変え、世界を変えていくのです。神の国は、イエスに従ったひとにぎりのガリラヤの人々の間に始まりましたが、それはたちまちローマ帝国内に広まり、ローマ帝国を変えてきました。

神の国は、それ自体の命と力によって成長していくのですが、だからといって、世界が自動的に神の国になるということではありません。人間は常に、まことの神を斥け、自らが「神」になろうとしてきました。平和や正義を好まず、自分の利益のためなら何でもするというような人々がいつの時代もいて、神の国を受け入れないばかりか、御国の民を苦しめ、神の国の働きを妨げてきました。神の国を妨げるものが取り除かれ、神の国が完成する時、それが再臨の時なのです。

二、預言と歴史

聖書の預言が成就して、キリストは来られました。第一の来臨（初臨）が成就しましたから、再臨の預言も必ず実現します。私たちは、聖書の言葉によって、主が再び来られることことを確信しています。

預言の成就は聖書が神の言葉であることの証拠のひとつです。いつの時代にも「私は神からの啓示を受けた」と言って書物を作り、「これは神の言葉だ」と主張する人たちがいました。また、「これから世界はこうなる。こんなことが起こる」との予言も数多くありました。けれども、そうしたものは、歴史的に信頼性のないもので、語られていることに大きな矛盾があります。なによりも、そこには、世界と人生に関する私たちの疑問に答えるものがないのです。そうしたものを読んでも、感動も励ましも、希望も得ることができません。しかし、聖書は違います。聖書は、歴史的に信頼できるものであり、さまざまな時代に、さまざまな人々によって書かれ

ているのに、そこには見事な一致、統一があります。イザヤ 34:16 に「主の書物を調べて読め。これらのものうちどれも失われていない。それぞれ自分の連れ合いを欠くものはいない。それは、主の口がこれを命じ、主の御霊が、これらを集めたからである」とある通りです。

聖書の預言は、驚くほど正確に歴史において成就しています。ダニエル 7 章の預言もそうです。この預言は「バビロンの王ベルシャツアルの元年」にダニエルに示されたものでした。バビロンはベルシャツアルの時代に滅びました。神はダニエルに、バビロンの後、どのような国々が起こり、ユダヤの人々がどのような運命をたどるのかをあらかじめ示されたのです。

ダニエル 7 章の預言を解くには、ダニエル 2 章のネブカデネザルに示された幻と比較してみるとよいでしょう。ネブカデネザルが見たのは「頭は純金、胸と両腕とは銀、腹とももとは青銅、すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土」（2:32-33）の人の姿でした。それはバビロン帝国とその後に起こる国々を指していました。「純金の頭」は第一の国でバビロン帝国です。「銀の胸と両腕」は第二の国、メディア・ペルシャの連合帝国です。バビロンはこのペルシャに滅ぼされました。「青銅の腹ともも」は第三の国、マケドニアから起こったアレキサンダー大王のギリシャ帝国で、「鉄のすね」と「一部が鉄、一部が粘土の足」は、第四の国、ローマ帝国を指します。鉄は強さを、粘土はもろさを表しています。ローマ帝国は強力な帝国でしたが、さまざまな人種が集まっ

てできており、その内部にもろさをかかえていました。

ダニエル7章には、ダニエルが見た四つの獣の幻が書かれています。この四つの獣は、ダニエル2章の四つの国にあてはまります。第一の獣、ライオンは第一の国、バビロンのことです。ダニエル7:4に「見ていると、その翼は抜き取られ、地から起こされ、人間のように二本の足で立たされて、人間の心が与えられた」とあります。それは、ネブカデネザルが神の刑罰によって、野の獣のようになりましたが、そこから回復したことを言っています。第二の獣、熊は、第二の国、ペルシャ、第三の獣、ひょうは、第三の国、ギリシャ帝国とそこから分かれた国々のことです。ひょうに「四つの頭」がありましたが、それは、アレクサンダーの後継者を名乗った四人の将軍、マケドニアのカッサンドロス、アナトリアのリュシマコス、シリアのセレウコス、エジプトのプトレマイオスを指しています。

第一から第三までの獣はそれぞれ、ライオン、熊、ひょうといった動物で表すことができましたが、第四の獣は、今までの獣とは違い、どんな動物にもたとえられないほどのものとして描かれています。この第四の獣はローマ帝国のことです。この獣には十本の角がありましたが、さらにもう一本の角がおこり、先の三本の角を倒しました。そしてその角には「大きなことを語る口」がありました（ダニエル7:8）。これは神への冒瀆のことです。救い主はローマ皇帝の代理者、総督ピラトによって十字架につけられました。ローマ皇帝はみずからを神と

し、自分を礼拝させました。エルサレムの神殿を破壊し、神殿跡にローマの主神ユピテル（ジュピター）の神殿を置きました。そして、数知れないキリスト者を、十字架にかけたり、火あぶりにしたり、猛獣の餌にしました。ローマ帝国は神への冒瀆の限りを尽くしたのです。

この預言が示された時、ペルシャはすでに力を持っていましたが、アレキサンダーを生んだマケドニアやローマは何の力も持たない小さな地方都市に過ぎませんでした。しかし、バビロンからローマに至る歴史は預言の通りに進んでいきました。このことから、聖書が神の言葉であって、その預言はかならず成就し、実現するものであることが分かります。

三、再臨の預言

ダニエルに示された幻の通り、イエス・キリストは、第四の国、ローマ帝国のときにおいでになり、「神の国は近づいた」と言って、神の国を始められました。けれどもその時はしもべの姿でおいでになり、ダニエル書にあるように「天の雲に乗って」ではありませんでした。ローマ帝国は滅びましたがイエスはまだ雲に乗って再臨しておられません。ではダニエルの預言は間違っていたのでしょうか。いいえ、神の国は来たのです。そして、第四の国もまだまだ続いているのです。西ローマ帝国は紀元475年に、東ローマ帝国は1453年に滅びましたが、その後、ヨーロッパの王たちは「ローマ皇帝」を名乗ってきました。ローマ帝国は人類の歴史の中で、それまでになく、その後も起こらなかった最大の帝国でした。

ローマ皇帝は途絶えましたが、その文化や学問、法律や制度、政治や軍事は、ずっとその後の時代を支配してきました。そういう意味では、ローマの時代は今も続いているのです。

ヒットラーなどの独裁者たちが目指したのはじつにローマ帝国の復活であり、ローマ皇帝になることでした。現代の政治家の中にも、心ひそかにそれを目指している人々がいるかもしれません。ヨハネの黙示録には、全盛期のローマ帝国さながらの世界帝国が生まれ、初代教会にあったような迫害が再び起こることが預言されています。

しかし、その国がどんなに強くても、神の国を阻むことはできません。ダニエル 2:44 に、この世の帝国は、「人手によらず切り出された石」、つまり、神の国によって打ち砕かれると言われています。こう書かれています。「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国は他の民に渡されず、かえってこれらの国々をことごとく打ち砕いて、絶滅してしまいます。しかし、この国は永遠に立ち続けます。」

ダニエル 7:13-14 には、「人の子」と呼ばれるキリストが「天の雲に乗って来られ」、このお方に「主権と光栄と国が与えられ」、「諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕え」、「その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない」（7:13-14）と記されています。この世の国はどんなに栄えよう

と、永遠ではありません。それがどんなに信仰者を苦しめようとも、その権力は絶対ではありません。再臨のキリストが神の国を打立てられるのです。

ダニエルに示された幻の解き明かしは、7:17-18でこう要約されています。「これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。しかし、いと高き方の聖徒たちが国を受け継ぎ、その国を永遠に、世々限りなく保つ。」バビロンから始まる四つの国はすでに起こり、今は第四の国の時代が続いています。この後、信仰者にとって大きな苦しみ時代が来るでしょう。しかし、キリストを信じる私たちは、神の国を受け継ぐ者とされています。信仰のゆえに受ける苦しみは無意味ではありません。私たちは、今の世でも、深い慰めと癒やしを受けることができ、キリストが再び来られる時には神の国を受け継ぎ、大きな報いを受けるのです。イエス・キリストに従う決意を新しくして、再臨の希望を確信し、保ちましょう。新しい年を迎えるたびに、再臨の時が近づくのです。これから迎える年を、再臨の主をお迎えする備えをする年としましょう。

(祈り)

主なる神さま。あなたは国々を治め、歴史を導いておられます。これから後、困難な時代がやってくるでしょう。しかし、イエス・キリストは再び来られ、私たちに、永遠の神の国を受け継がせてくださいます。その約束を信じて、その日を待ち望む私たちとしてください。再び来られる主イエス・キリストのお名前です。祈ります。

福音と日本文化 ⑤ 一あとがきにかえて

ジェームス・バラ宣教師は1861年に来日し、鍼医師であった矢野隆元から日本語を習い、日本での伝道を始めました。矢野隆元はバラ宣教師からバプテスマを受け、日本人で最初のプロテスタントのクリスチャンとなりました。バラ宣教師は横浜の外国人寄留地に石造りの小さな会堂を建て、そこで20数名の青年たちに英語と聖書を教えていました。彼らはまだバプテスマを受けていなかったのですが、旧暦の正月に一週間の祈り会を持ちたいとバラ宣教師に申し出、その熱心な祈りによって導かれた9名がバプテスマを受け、他に2名が加えられ、11名の青年たちによって1872年3月に、日本で最初のプロテスタント教会、日本基督公会が始まりました。

バラ宣教師は1919（大正8）年まで、日本で50年間働き帰国、翌年ヴァージニア州リッチモンドで亡くなりました。

バラ宣教師と前後して来日したサムエル・ブラウン宣教師は「ブラウン塾」を開き神学教育に貢献しました。ブラウン塾からは、植村正久（富士見町教会牧師）、井深梶之助（明治学院総理）、押川方義（東北学院、宮城学院創設者）、本多庸一（青山学院校長）ら明治期の教会の指導者が生まれています。

ブラウン宣教師はまた聖書の日本語訳のためにも尽力しましたが、病気のためその完成を見ないで帰国しなければなりませんでした。しかし、宣教師たちが遺してくれた日本語聖書（文語明治訳）と、彼らが感化を与えてくれた日本人指導者たちは、宣教師たちの帰国後も、日本に大きな祝福をもたらしたのです。

中尾フィリップ



Penguin Club

www.penguinclub.net